

白山ふるさと文学賞

第三回 白山市ジュニア文芸賞 受賞作品

【島清部門】

小学生高学年小説の部 優秀賞

夏

旭丘小学校六年

坂口 さかぐち

凜香 りんか

埃臭い匂いが鼻をつく。コツコツと薄暗い部屋に、俺の靴の音だけが不気味にこだましている。

辺りに物などはなく、ただ椅子が無造作に部屋の隅に置かれ、埃をかぶっていた。コンクリートの壁には、くもの巣があちらこちらにある。もう何年も、此処には誰も来ていなかった。廃墟になってしまったこのビル。昔は俺達は、此処を秘密基地にして遊んでたりもした。まあ、俺を含めても二人だけなんだけど。少々懐かしい気もするが今はそんな事をしに来たのではない。

八月の焼けるような暑さで、このビルは蒸し暑くなっていた。全身から汗がべつとりと付き、気持ちが悪かった。

コンクリートの床を淡々と進むと、鉄で出来た扉が俺の前に立っていた。そこには、『立ち入り禁止』と、赤のマジックで書かれたポロボロの紙がガムテープでとめられていた。

俺はそれを無視して、強引にドアノブをひねった。鍵はもう何年も前の物で、簡単に開ける事ができた。昔より、扉が軽く感じた。

ブワツと、建物の中よりも暑い熱気が体を包みこんだ。

薄暗い埃まみれの部屋をかけ巡り、いきなり太陽の照りつける暑さブラス、明るさで気がおかしくなりそうなのを抑え、俺は扉の向こう側を進んだ。

太陽の光で、俺は思わず顔をしかめた。額から流れる汗が、目にしみる。遠くなのか、近くなのかよくわからない場所でセミが大合唱している。勿論、風なんて吹いていない。

屋上、それは、嘲笑うように俺の心を妖しくなぞる。

いつかの夏、今日みたいに暑い日、俺達はある約束を交わした。この場所です。

翔の、あの言葉で。

『一緒に、帰ろう』

その日、俺達の住む町は、例年より五度高い三十五度の真夏日を記録した七月だった。

もう少しで中学に入って初めての夏休みという事もあって、少なくともクラスの大半の奴らは夏休みの話題で持ち切りだった。

まあそんなのは、俺には関係ないが。

俺こと、一条裕渡は、友達を作らない。いや、作りたくないのだ。

黒髪黒縁メガネのいたって勉強出来る奴だし、それにただ余計に気を遣うだけで、必要ない。周りはそんな俺を、冷たいだの、友達居ないだの、色々言っている。

何より、人が寄って来ないのだ。

：一人を除いては。

「裕渡君、テストの結果どうだった？僕、わからないところがあってさ。」

少しパーマがかかった茶髪に、大きな瞳。俺と反比例の小柄で可愛い容姿の持ち主の藍崎翔。漆黒の瞳で、初雪のような白い肌。

そう、この男は俺の唯一の友達。俺は小学生の時から根性が曲がっていた。その時からこいつは何故か俺に絡んでくる限り、相当な物好きだと思う。

そしてこいつも、友達が少ない。

元々病弱で、殆ど学校に来れなかった為にできなかったらしい。

「だから？俺はいつも通り良かったけど。」

正直、自分でも冷酷な人間だと思った。

しかし、そうでもしないときつとこいつは俺から離れようとしないうろろ。

「あ、教えてほしいんだ…。駄目かな？」

大きな瞳が俺をしっかりと掴んで離さない。声が喉にはりついて出てこなかった。

やめろ。とつと俺から離れて勝手に友達でも何でも作って、青春を謳歌してくれ、頼むから。

何て、心で言いながら、俺は黙ったまま頬杖をついて外方を向いた。「ごめんね、迷惑だった？」

片目を閉じて、引きつった口角で罰が悪そうに聞いてきた。

ああ、迷惑だ。何処かへ行ってくれ。

やはり、俺は言えなかった。心の奥深く、真つ暗な所で、俺は俺らしくない事を思っていた。

「迷惑なんかじゃない。」と。

俺は、それを無視した。暗闇に、押し込めて。

「じゃあ、教えて！」

隣の方からの衝撃的な言葉に一瞬俺は頬杖していた手から頭が落ちそうだった。

昔から、こいつの言う事は至極矛盾している。大きな瞳をランランと輝かせ、俺をジツと見つめる。見た目によらず、気の強いところが厄介だ。

俺は深く溜め息をついて、

「わかったよ。」とだけ返事をした。

翔は満面の笑みで「ありがとう！」と言って、B5サイズの紙を勢いよく俺の前に差し出した。一番上には、赤で大きく、68と書かれていた。

いつだってこうだ。

俺がいくら拒もうとも、翔の俺とは違う強引さに、負けてしまう。

一つずつ、間違った部分を丁寧に教えていく。

心のどこかで、差別していた。

俺は、勉強しか取り柄のない冷酷人間。翔は顔も良くて、性格も良い。

おまけに裕福と、見事な三拍子だ。

どこにも、勝りようがなかった。俺は、翔にとって何なんだった。

いつか飽きられるんじゃないか、という不安が俺の脳裏をよぎる。

その日は何故か、よく眠れなかった。

相変わらず太陽は、ジリジリと照りつけ、まぶしい朝を運ぶ。

俺はもうすっかり歩き慣れた道を、大きな欠伸をしながら歩いていった。

今日は、心が穏やかではない。理由も、知っていた。

不意によぎったあの思い。日が変わっても、忘れられなくて、消えなくて、俺の心には、灰色の雲のように厚くもやがかかっていた。

翔にどんな顔で接すれば良いのか、俺にはわからない。出来れば、会いたくない。

けど、翔は俺の思いとは裏腹に、笑って話し掛けてくるんだろう。

朝からそんな思考を巡らせて、俺は教室へと入った。

「あ、裕渡君！」

放課後、翔は廊下で俺を呼び止めた。

クラスが違うから、何とか放課後まで保てたが……。俺は侮っていた。翔を。

翔は大きな模造紙を丸めた物を二つ抱え、それを揺らして、俺にかけ寄ってきた。

「裕渡君、今帰るの？あ、良かったら一緒に帰ろうよ！」

俺は啞然とした。

生まれてこの方、友達に「一緒に帰ろう」と言われた事がないのだ。

この声を、単語を聞いた途端、何か俺の中でブツンと音を立て、切れた気がした。

胸の中で、ドクドクと溢れ出てくるものがあつた。けど、何かはわからなかった。

しかし、本能的に俺は察知した。

これはいわゆる、嫉妬心というやつだろう。こいつは、幼い時から「帰ろう」と言ったり、言われたりしたんだと思う。それを、病気になるのが邪魔をしていたんだ。そしてこいつは、そんな言葉を俺に向かつて言った。

どうしようもない思いが、俺の体を、心を支配する。

「裕渡君？」

翔が心配そうに俺の顔をのぞく。

何故か、俺の体のどこかで、警鐘の音がカンカンと、耳をふさぎたくなるくらいの大きさで鳴った。

「うるさい…。」

「…へ？」

次第に、その警鐘は諦めたかのように音が弱くなっていく。

もう、俺の体は俺では制御できなくなっていた。

「もう、俺に近寄るな。」

「ゆ、裕渡君？」

まるで、何処の誰だかわかんない奴に、俺の体に乗っ取られたように。

翔は目を見開いて、「何を言っているんだ。」とでも言いたそうな顔をして、俺を見つめる。

いつも、嫌々見せられていた、こいつの顔。今は見たくない。俺は翔から視線をはずして下を向く。ずつと、我慢していたこと。

「もう二度と、俺の前に現れるな！」

強く、突き放す言葉を言った。友達に。

俺は無能だ。いくら勉強が出来ても、俺は知らなかった。いや、認められなかった。俺と翔との差というものに。

翔に背を向けて歩き出す。背後から聞こえる、懐かしい裕渡君と呼ぶ声は、あの頃のあどけなさは消え、何処か儂げで、悲痛なものだった。

これが、最後になる、翔の声とは知らず、夜が更けた。

少し、後悔していた。あの時、強く言うよりも、もっと対処の仕方はあったんじゃないかって。翔と会うのに、少し気が引けた。

けど、今日翔は学校に来ていなかった。廊下を歩いて見える、翔のクラス。あいつの席だけが、まるで隔離された空間のように、空いていた。

その時までには、珍しくも何ともなかった。その時までには。

その翌日も、その次も、いつまで経っても翔の席は空いていた。もうその頃になると、俺は違和感を覚えた。

しかし、そんなのも束の間。病弱なあいつだから。と、片付けた。

結局、夏休みの前日まで翔が学校に来る事はなく、席は空いたままだった。

八月の異常な暑さが、俺の体と精神を蝕んでいく。

窓にある風鈴は、音も鳴らさずにただ静かに揺れていた。

「暑い…。」

昼間からベッドの上で仰向けになっていた。夏休みの予定なんてものはない。それより、すぐす人もいない。

「暇だし、散歩にでも行くか。」

ムワツとした暑さと、蝉の鳴き声が苛立たせてくる。外に出て三分もしないうちに全身から汗がじんわりとTシャツに滲む。

住宅街をしばらく歩いていると、こんな暑い中でおばちゃん三人が話していた。

くだらない話だろ、と、俺は通り過ぎようとした。しかし、不意に翔君という声が聞こえた。久し振りに耳に入る言葉。

俺は咄嗟に、電柱の後ろにもたれ隠れた。

「藍崎さん家の翔君、夏休み前に突然病状が悪化して、夏休み中に亡くなったんですって。重い病気で…。」

……………

カケルクン、ビョウキ、ナクナッタ…。

色んな単語が俺の頭の中で交錯して、意味が解らなくなる。

俺は無意識に、その場から走っていた。ただ、行く当てもなく、ただただ走っていた。

俺が走る度、移り変わる景色全てに、色が消えていた。まるで、白黒写真のよう。

気が付けば、俺は薄れゆく記憶の中、ずっと閉ざし続けていた廃墟ビルの前に立っていた。何故此処に来たのか、俺にも解らない。

しかし、此処に来なければいけない気がしたんだ。

俺は、黄ばんだガラスの重い扉を無理矢理開けて、中に入る。

涙は出なかった。ただ、屋上に向かって。――。

今更、というように、俺の中であの約束がリピートする。

『一緒に帰ろう。』

ここでようやくといったように、俺の頬ほおに涙が伝つたう。

いくら後悔しても、いくら嘆なげいても、世界はお構まい無しに回って、俺を大人にしていく。

だから、これだけはせめて忘れないでいよう。罪滅なぼしにもならないけど、日々薄れゆく記憶の中、いつまでも輝き続ける存在が居た。それはもう、あの抜けるように青い空の向こうに居る君に届ける、忘れはしない夏の約束。

「翔、一緒に帰ろう。」

青空に俺の声だけが溶け込んでいく。風が木の葉を揺らした。どこかで、翔が「うん。」と言った気がした。

これは俺の、八月のある日の物語。

